

第4回修道会・宣教会フォーラム

共に「宣教を推進

福岡

修道会と宣教会の会員が集まり、日本の宣教を考える第四回のフォーラムが二月一日、福岡・大名町教会で開かれ、長崎教区の高見三明大司教ほか、約百三十人の司祭、修道者が集まった一写真。今回のテーマは、「NICEIから三千年―九州からみた福音宣教その課題とチャレンジ」。

準備を担当した頭島光神父(レデンプトール会)によると、今回は福音宣教の現状を具体的に見るため、小教区だけでなく施設や教育現場からの報告を取り入れた。また、基調講演を教区司祭である山元眞神父(福岡教区)に頼み、ほかにも福岡教区司祭の参加があつて、「教区司祭とはまったく関係ないフォーラムではない」形となった。

第二回の福音宣教

推進全国会議(NICEI)に主にかかわったという山元神父の基調講演では、宣教を「宇宙レベルで考える」ことが勧められた。「九州とか、日本とか、世界とか、そのような小さい枠の中で福音というものを考えない。



世界はどんどん変わっていくのに、教会はまだ旧態依然としたものを続けている。これからは文化や生活そのものの中にすでに働いている神の働きを見ること。あなたは神に救われているということとを伝えなければなりません」と話し、自己変革、自己回心が福音宣教のための課題だと述べた。

続いて、佐藤洋子修道女(長崎純心聖母会)が、

純心中学校・純心女子高等学校で長年、平和教育を続ける中で、生徒たちの声から逆に気付きを受けている体験などを、山田春代修道女(お告げのマリア修道会)が、自治体が始めた特別養護老人ホームを同会で引き受け、宗教色のないところから次第にカトリックの精神が浸透していった様子を、それぞれ発表した。聖サベリ才宣教会のタニロ・マルケット神父

は宣教のための資料として、滞在↓識別↓観想↓宣教という司牧のサイクルを説明した。

出ていく、外に向かう

その後、小グループでの話し合いを行い、結果を全体で発表した。頭島神父はこれらを聞いて、「全体としては、NICEIで言われていた「共に喜ぶ」、特に「共に」ということが共通理解として出てきたのではないかと。施設の人々と共に、信徒と共に、同じ目線に立って福音宣教を推進するということがNICEIの基盤にあったわけですから」と語った。

前回神戸のフォーラムでは具体的な提案が出されたことに比べ、今回は時間の制約もあり、そこまで行かなかったが、「課題とチャレンジ」はある程度浮き彫りになった、と話す。「小さな福音化の種は、施設や教育現場でのシスター方の努力奮闘を見ると、すでに社会の中にまかれていますと感じます。問題は、小教区が信者でない人のところに行つて福音化というものをしているか? 教会では、司祭たちが信者の司牧に掛かりきりで、外に向かつてはいない、そこに課題が見えてきたと思います」